研究班２

多言語状況と日本語

東京大学教養学部　平野健一郎
国立国語研究所　　西原　鈴子

2001 年までに 10 万人の留学生を受け入れる状態に持っていくという、いわゆる「留学生 10 万人」計画を達成できるかどうかが、数年前から危ぶまれている。また、うなぎのぼりに増えていた世界各地の日本語学習者の総数も、昨年からは減少に転じたのではないかと心配されはじめている。たとえば、中国などの日本語ブームに翳りが見えるというのである。バブル経済期に乱立した外国人日本語教育機関が地を払ったようにほとんど消えてなくなり、ブームを当て込んで養成を始めた日本語教師も、いよいよとなった時には就職口がなかなか見つからない状況だという。そこで、日本語教育のいっそうの改善が対策として叫ばれるが、そのこと自体はよいとしても、日本語教育のみを云々するのはいささか近視眼的であるように思われる。

現に、日本国際教育協会が 1984 年以来、国内・外で毎年実施している日本語能力試験の受験者数は、昨年も依然として前年を超える伸びを記録している。94 年の受験者合計が８万２千人強であったのに対し、95 年は約８万８千人であった。92 年の６万８千人台から 93 年の８万人台に増えたあと、最近３年間は８万人台で頭打ちになっているが、これは日本国内での受験者が 93 年をピークに少しずつ減少していることによるようである。一面、これはむしろ健全な現象というべきかもしれない。なぜなら、国内受験者が減少したのは、日本語学習を別の来日目的の口実にしたような外国人が減ったためもあるかと考えられるからである。国外での受験者は順調に増え続けている。日本語への関心は全体としては衰えていないように思われる。

そもそもこの能力試験は、日本の大学入学に相応しい日本語能力を身につけることを援助するために設けられた制度であると理解している。４級に分けられた試験のなかでも、大学院入学を目標とする１級の試験が中心で、過去の成績分布図を見ると、受験者の関心も能力も高いように思われる。平野の大学院演習に参加する留学生の日本語の優秀さから判断しても、この試験の効果は大きい。近年、このクラスの受験者数が伸び悩んでいるのは、したがって、日本語教育の問題よりももっと大きな問題を日本の大学が抱えていることを暗示しているのかもしれず、その方が心配である。すなわち、日本の大学・大学院が、世界の若者にわざわざ第二の言語として日本語を習得しても学びたいと思うようなものを提供する教育機関とみなされているかどうか、という問題である。「日本語の国際化」や「日本語の国際性」という課題もこの問題点と関連しているのではないだろうか。

「日本語の国際化」「日本語の国際性」を少し広い視野に置きなおして考えてみるために、国際関係の歴史のなかではどのような位置が言語に与えられてきたかを大雑把に振り返ってみたい。

国際関係における言語という視点から、国際関係の歴史を大きく区分すると、（１）コスモポリタン／パロキアルの時代、（２）インターナショナル／ナショナルの時代、（３）トランスナショナル／エスニックの時代の三期になるであろう。第一期は、いわゆる「近代」以前の長い期間で、ごく少数の人々（外交官、貿易商人など）がリンガ・フランカ（ラテン語、アラビア語、中国語、フランス語など）を駆使して国際的に活動する（コスモポリタン）一方、ほとんどの人々は生まれついた土地で、その土地のことばを使って一生を終えた（パロキアル）時期である。第二期は、いわゆる「近代」に相当し、人々は国民として、その国家の領域では統一された一つの言語、「国語」を使うものとされ、国際舞台では、強い国家の「国語」が国際語として通用した。現在は、この第二期から第三期への移行期にあると考えられるが、ところによっては

すでに第三期の傾向が現れている。すなわち、「ヒト、モノ、カネ、情報の国際移動」がしきりになるにともなって、国際関係は相互依存的、ボーダーレス、あるいは脱国家的（トランスナショナル）になり、言語や文化における人々の志向はナショナルからエスニックに変わりつつある。

第一期では、少数の言語が国際的通用力によってリンガ・フランカとなった。第二期には、なるべく多くの人々が一つの言語を用いることが求められ、ある言語の国際性はその言語の使用人口もしくは使用地域の大小で測られる。国力（すなわち、ある意味では「国語力」）の大きな国は、国外に向けてもその国語の使用地域の拡張（植民地の獲得など）を図ったのである。第三期になると、脱国家的な国際活動をする人々が飛躍的に増え、その人々は必要や状況に応じてマルティリンガルになる。言語の側からいえば、その国際性は外国語としての使用者数の問題ということになるであろう。

世界が国際関係の第三期的な様相を見せはじめるにつれ、文化、言語面でクレオールに関心が集まり、一部ではクレオールこそこれからの文化、言語の姿だという言説も行われている。しかし、国際関係と言語の歴史を上のように理解すると、クレオールは第二期の遺物にすぎないことになる。植民地主義が異言語の接点に産んだのがピジンであり、それを単一言語として使わざるをえなかった人々が作り出したのがクレオールだからである。国際関係の第三期における言語の姿はクレオリティにではなく、マルティリンガリズムにあるというべきであろう。（なお、このように考えると、国連公用語の問題や通訳の問題についても面白いことが発見できる。）

1945 年までに日本人が企てた「日本語の国際化」は、要するに、強引な使用地域の拡大であった。今日われわれが願っている「日本語の国際化」が、外国語としての日本語の使用者数を（要望に応じて）増やすことにあるのはいわずもがなである。したがって、日本語学習の要望を増やすことが「日本語の国際化」の要諦であろうが、このような当たり前のことを考えたのは、留学生の日本語の見事さに感心したことと、研究班２の駒場グループにおける以下のような研究会でいろいろなことを学んだ成果である。

・駒場グループ第１回研究会（６月 22 日）
水村美苗「『近代日本文学』について」

小説家の水村美苗が、言語をめぐる独特の体験と、日本語の虚構性を認識し、再発見する過程を、その結果としての作品『私小説　fromleft to right 近代日本文学』の自己分析を通じて報告。

・第２回研究会（７月 24 日）
杉本大一郎「自然科学の研究・教育における日本語」（公開シンポジウム）

天体学を専門とする杉本大一郎が、自然科学の分野における英語使用の確立と日本語使用の意味について報告。

・第３回研究会（10 月４日）
中井和夫「ウクライナ語の状況について」

ウクライナ史を専門とする中井和夫が、ウクライナ語の置かれてきた位置の特殊性について、言語政策の観点を中心に報告。

・第４回研究会（10 月 27 日）
？百秀「日本語で書いた韓国人作家」

比較文学を専門とする？百秀が、韓国人作家李光？の「萬爺の死」を題材に、韓国近代文学との関わりとともに、二カ国語作家の問題について報告。

・第５回研究会(11 月６日）
エリス俊子「外国語として読む日本語文学」

比較文学・比較文化を専門とするエリス俊子が、川端康成の「千羽鶴」を題材に、外からみた日本文学と日本語について、さらに、最近のオーストラリアにおける日本語教育の現状について報告。

・第６回研究会（12 月 16 日）
？在？「韓国作家の日本語小説に関して」

韓国外国語大学校で日本語教育、日本文学研究に携わる？在？氏を韓国から招いて合宿を行った。同氏が、韓国作家が日本語小説を書くことの意味と韓国近代文学との関わりについて報告。

国語研究所グループは、「言語事象を中心とする我が国をとりまく文化摩擦」を現時点での社会・言語現象として捉え、主として社会言語学的な視点から調査研究することを目的としている。今年度は２つのチームがそれぞれのタイプの研究を継続してきた。

茂呂（筑波大）・古川（国語研）チームは、古川が埼玉県川口市を、茂呂が茨城県つくば市を中心に、地域の言語接触について参与観察を進めており、今回は茂呂が研究成果の一部を発表する。それぞれの地域に居住する外国人たちの地域社会への一方的な適応について観察するのではなく、彼らを取り巻く地域社会が新来者を迎えてどのように活性化され、どのように変容していくかを双方の観点を取り入れながら継続的に観察しようとしている。

もう一つの通称西原チームは、日常生活の中で体験する場面を中心として、選択したある特定の言語行動場面を刺激とする実験的な意識調査を行ってきた。言語接触を異文化間のみならず、異地域間の問題としても考える必要があるとの前提にたって、同じ場面のビデオによる刺激を国内および国外の各地域に在住する日本人に示し、それに対する反応を収集するという意識調査である。選択した言語機能は、「陳謝」および「感謝」である。たとえば「陳謝」については、以下のような要因が働く可能性がある。

（１）謝罪が必要な場面かの判断（動機）
（２）謝罪の表現の種類（表現）
（３）謝罪する相手の素性への配慮（判断基準）
　　年齢、服装、表情、身振り、性別など
（４）相手の出方への対応（反応）
（５）関係の修復方法（修復）
（６）他地域の言語行動についての知識
　　（ステレオタイプの把握）
（７）このましい謝罪のあり方（規範意識）
（８）自分自身のアイデンティティ（自己帰属）

これらの要因のそれぞれについて、複数の変数が存在することが可能である。調査の結果から、得られる複数の変数間の相関関係を分析することによって、Inter-cultural な接触場面ではたらく要因と、Intra-cultural な接触場面ではたらく要因間の関係も見えてくることが期待されている。

このような場面設定→調査→分析の流れは、対象者を日本在住の外国人にも広げて、今後とも継続される予定である。そのことが、「誤解」と「摩擦」との違いをより明らかにする効果を生むと同時に、摩擦を回避する、あるいは摩擦を修復するストラテジーの開発への糸口となることも遠い目標となっている。

以下に、「陳謝」を課題とした調査項目の一部を紹介する。（国外在住日本人用）

【前提の説明】
これから短い映像を見ていただきます。出てくる場面は，日本のマンション（集合住宅）の廊下です。二人の女性がすれちがう時に，一方が急いでいたためにぶつかりそうになりちょっと体がふれあいました。二人は，互いに見知らぬ同士です。二人は何か言葉をかわしていますが，まず，音声を消して見ていただきます。

【刺激映像を音声なしで提示する。（以下の項目を日本と対象国で質問）】
◆この場面を，［日本／対象国］での［日本人同士／対象国人同士］の出来事だとして考えて下さい。
(1)［日本／対象国］では，この二人のうち，どちらから声をかけるのが普通だと思いますか？
　ぶつかった方／ぶつかられた方
　／どちらとも決まらない
(2)ぶつかった方（若い女性）が先に謝らないとしたら，どんな感じがしますか？
(3)ぶつかられた方（着物の女性）が先に何かを言うとしたら，どんな感じがしますか？

＜中略＞

【刺激映像を音声付きで提示する】
◆ぶつかられた（着物の方の）人のことをうかがいます。この人の（相手の謝る前）の話し方について，どんな印象を受けましたか？
(1)①この場面での言葉として，まずは適当だろう。
　②この場面での言葉としては、不適当だ。
　どんな点が不適当だと思いますか？
　　言葉／身振り／表情
(2)この人はどんな性格の人に見えますか？　　控え目←→きつい・勝気
　　やさしい←→厳しい　など

・［日本で］この場面での言葉として言い過ぎだと思いますか？それとも，言葉が足りないと思いますか？
　足りない／これくらいでいい／
　多過ぎる
どんな点に過不足がありますか？
　言葉／身振り／表情

・もし，あなたがこの場面でこのような言い方をされたとしたら，どんな気持ちになりそうですか？
　① 不愉快→どんな点が不愉快ですか？
　　言葉／身振り／表情
　② なんとか我慢できそう
　どんな言葉を返しそうですか？

＜中略＞

◆同じ場面が，もし［対象国］で［対象国人同士］の間で起きたとしたら，謝る方の人はこの日本の映像と違った謝り方をすると思いますか？それとも，大体同じような謝り方でしょうか？
　①大体同じだろう
　　言葉／身振り／表情
　②異なるだろう
　　言葉／身振り／表情

・そのような謝り方は日本の謝り方と比べてどんな印象を持ちますか？
　①一般的に，日本の方がそっけない（簡単・軽い）。［対象国］の方が丁寧（きちんとしている）。
　たとえば，どんなところが？
　　言葉／身振り／表情
　②一般的に［対象国］の方がそっけない。日本の方が丁寧（きちんとしている）。
　たとえば，どんなところが？
　　言葉／身振り／表情

◆同じ場面が，もし［対象国］で起きたとしたら，ぶつかられた方が相手の謝ってくる前になにか言うとして，この日本の映像と違った言葉を言うと思いますか？それとも，大体同じような言い方でしょうか？
　①大体同じだろう
　　言葉／身振り／表情
　②異なるだろう

・そのような言葉の返し方は日本と比べてどんな印象を持ちますか？
　①一般的に，日本の方がそっけない（簡単・軽い）。［対象国］の方が丁寧（きちんとしている）。
　②一般的に，［対象国］の方がそっけない。日本の方が丁寧（きちんとしている）。
　たとえば，どんなところが？
　　言葉／身振り／表情
　③日本の方が，攻撃的（相手の落度を指摘する，気を付けろと言うなど）。［対象国］の方が控え目。
　④［対象国］の方が，攻撃的（相手の落ち度を指摘する，気を付けろと言うなど）。日本の方が控え目。
　たとえば，どんなところが？
　　言葉／身振り／表情

＜中略＞

◆［対象国］と日本を比べて考えて見て下さい。一般的にいって，通りすがりの人など他人の体と自分の体が触れるということについての受け止め方（感じ方）は［対象国］と日本とで違うと思いますか？それともあまり違いませんか？
　①あまり違わない
　②日本の方が気にする
　③［対象国］の方が気にする

◆通りすがりの他人と体が触れた（ぶつかった）時の経験で，［対象国］と日本とで何か違うと感じた経験，あるいは，何かトラブルのような経験はありませんか？

＜以下略＞